

2.3 生態系の人為的な攪乱状況 (外来種の分布状況)

底生動物の場合は、食用として持ち込まれたスクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) やウシガエルの餌として持ち込まれたアメリカザリガニなどのように意図的に持ち込まれたものや、他の輸入水産物に混入して入ってきたものなど、本来は日本に生息しない国外の生物種が侵入し、自然界へも広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の本来の分布域外への移動により、生態的に優勢な外来種によって在来の生物種が減少したり、地域で保有されていた固有な遺伝子の自然には起こらない交雑による喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、外来種ハンドブック (日本生態学会編, 2002) で侵略的外来種ワースト 100 に指定されている底生動物や、環境省の外来生物法で特定外来生物および要注意外来生物に指定されている底生動物の確認状況について整理しました。

【外来種の確認状況 (スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ))】

(底生動物・魚介類調査)

・ スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) を 13 河川で確認

スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) は南アメリカ原産の巻貝で、1981 年頃に食用として養殖するために台湾から輸入された種です。この種はイネ等の農作物に被害を与えることが知られています。主に水田や水路に多く分布しますが、河川が分布拡大の経路になっている可能性が考えられることから、河川での確認状況を整理しました。

スクミリンゴガイは今回とりまとめを行った 55 河川のうち、13 河川で確認されました。前々回、前回は調査を行っている 49 河川での確認状況からみると、やや増加傾向にあることがうかがえました。

(資料掲載: 2-33、2-44 ページ)

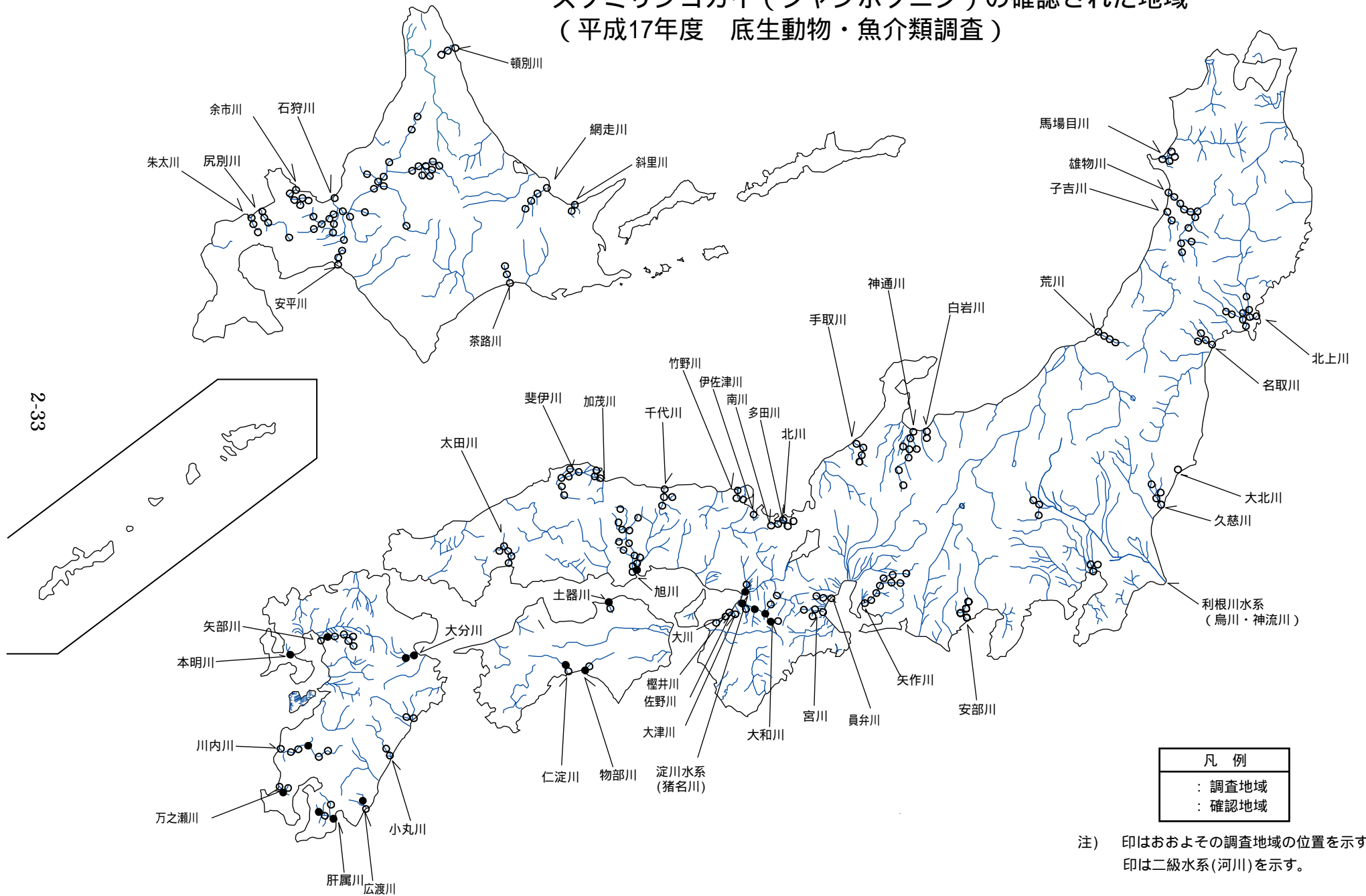
確認河川数の比較 (対象河川 49 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	7 河川	9 河川	13 河川

スクミリンゴガイは、生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック (日本生態学会編, 2002) で侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。また、環境省の外来生物法の要注意外来生物にもなっています。

スクミリンゴガイは、北海道地方、東北地方、関東地方、北陸地方、中部地方の河川では、前々回調査、前回調査、今回調査ともに確認されませんでした。一方、近畿地方の猪名川、四国地方の土器川、仁淀川では今回調査で新たに確認されました。

スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) の確認された地域 (平成17年度 底生動物・魚介類調査)



【外来種の確認状況（カワヒバリガイとコウロエンカワヒバリガイ）】（底生動物・魚介類調査）

・カワヒバリガイを1河川、コウロエンカワヒバリガイを6河川で確認

国外産の貝類として中国原産のカワヒバリガイとオーストラリア原産のコウロエンカワヒバリガイの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った55河川では、カワヒバリガイは中部地方の矢作川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、中部地方、中国地方、四国地方の6河川で確認されました。前々回、前回は調査を行っている49河川での確認状況を比較すると、カワヒバリガイは初めての記録でしたが、他の調査等ではすでに確認されています。コウロエンカワヒバリガイは、前回と大きな変化はみられませんでした。

（資料掲載: 2-35～36、2-42 ページ）

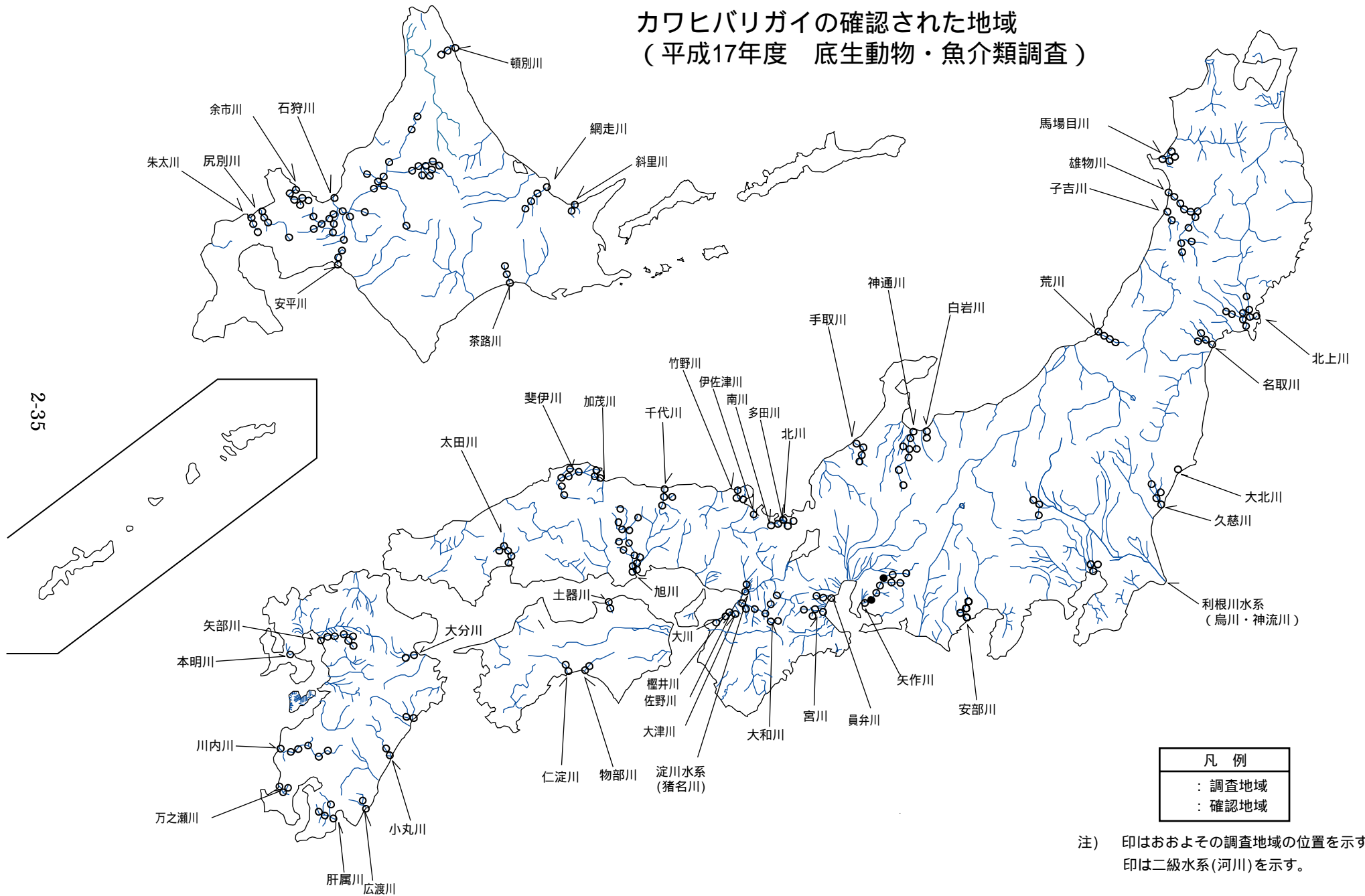
確認河川数の比較（対象河川: 49河川）

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
カワヒバリガイ	0河川	0河川	1河川
コウロエンカワヒバリガイ	3河川	7河川	6河川

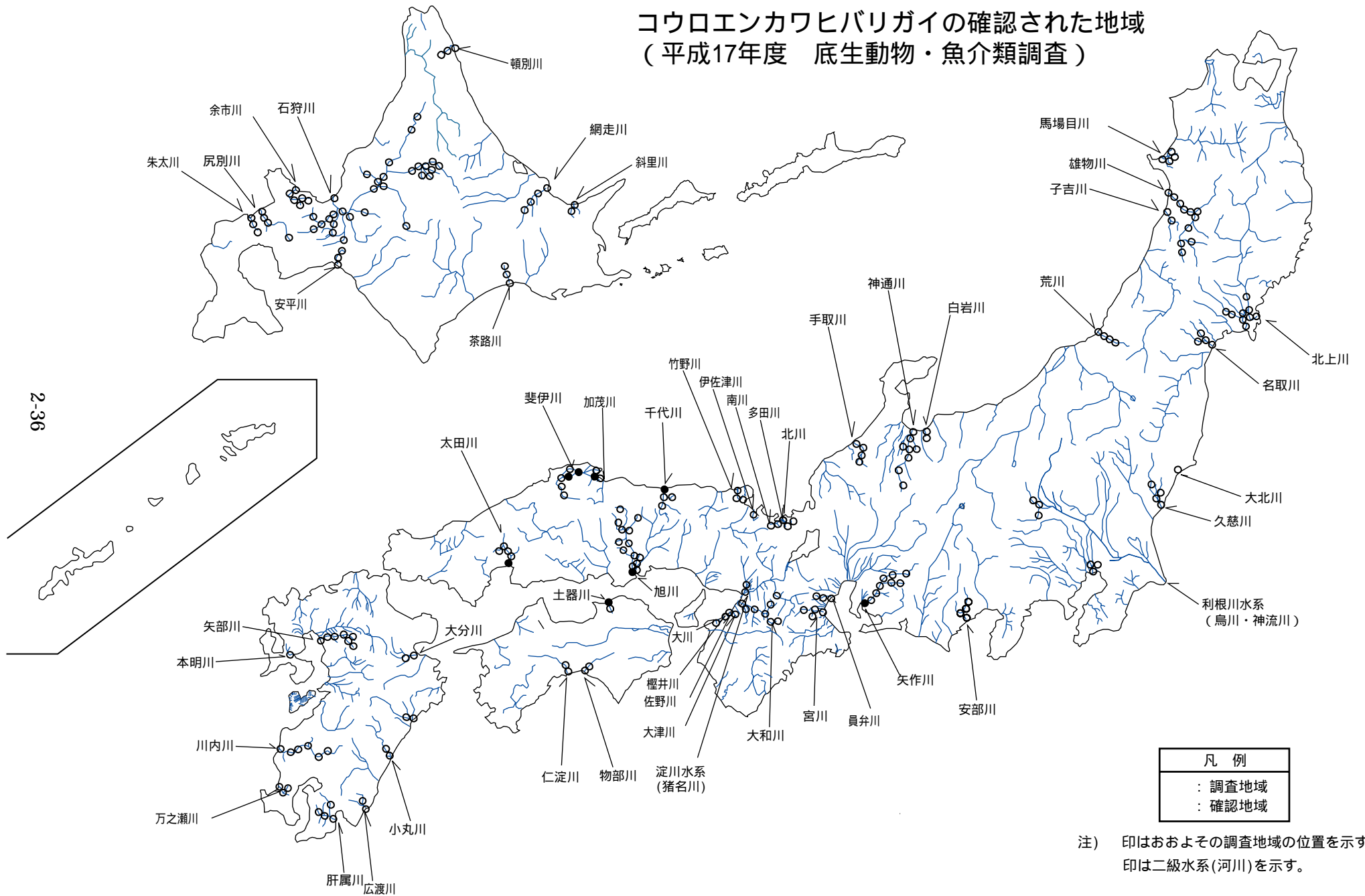
中国原産のカワヒバリガイとオーストラリア原産のコウロエンカワヒバリガイは、取水管や排水管の内壁に付着して、水の疎通を悪くする被害を出すのみでなく、大量斃死を起こし、水質の悪化を引き起こすことが知られています。カワヒバリガイは淡水域、コウロエンカワヒバリガイは汽水域に生息しますが、ともに河口域や河川域での分布拡大が懸念されている種で、生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック（日本生態学会編, 2002）で侵略的外来種ワースト100に指定されています。また、コウロエンカワヒバリガイは、環境省の外来生物法の要注意外来生物、カワヒバリガイは特定外来生物となっています。

今回とりまとめを行った55河川では、カワヒバリガイは中部地方の矢作川で確認されました。コウロエンカワヒバリガイは、中部地方、中国地方、四国地方の6河川で確認されました。前々回、前回は調査を行っている49河川での確認状況を比較すると、矢作川のカワヒバリガイは、河川水辺の国勢調査としては初めての記録でしたが、他の調査等ではすでに確認されています。コウロエンカワヒバリガイは、前回と大きな変化はみられませんでした。

カワヒバリガイの確認された地域 (平成17年度 底生動物・魚介類調査)



コウロエンカワヒバリガイの確認された地域 (平成17年度 底生動物・魚介類調査)



2-36

凡例	
○	: 調査地域
●	: 確認地域

注) 印はおおよその調査地域の位置を示す。
印は二級水系(河川)を示す。

・フロリダマミズヨコエビを本州以南の5河川で確認

フロリダマミズヨコエビは、北米原産の体長1cmほどの小型のヨコエビです。日本では1989年に利根川に流出する古利根川沼の水路ではじめて確認されました。2000年代に急速に分布を拡大し、近年では、東北地方から九州地方に至るまで広い範囲で確認されるようになりました。

今回とりまとめを行った28河川では、東北地方の名取川、雄物川、北陸地方の神通川、近畿地方の猪名川、大和川、九州地方の大分川の6河川で確認されました。

(資料掲載: 2-38、2-44 ページ)

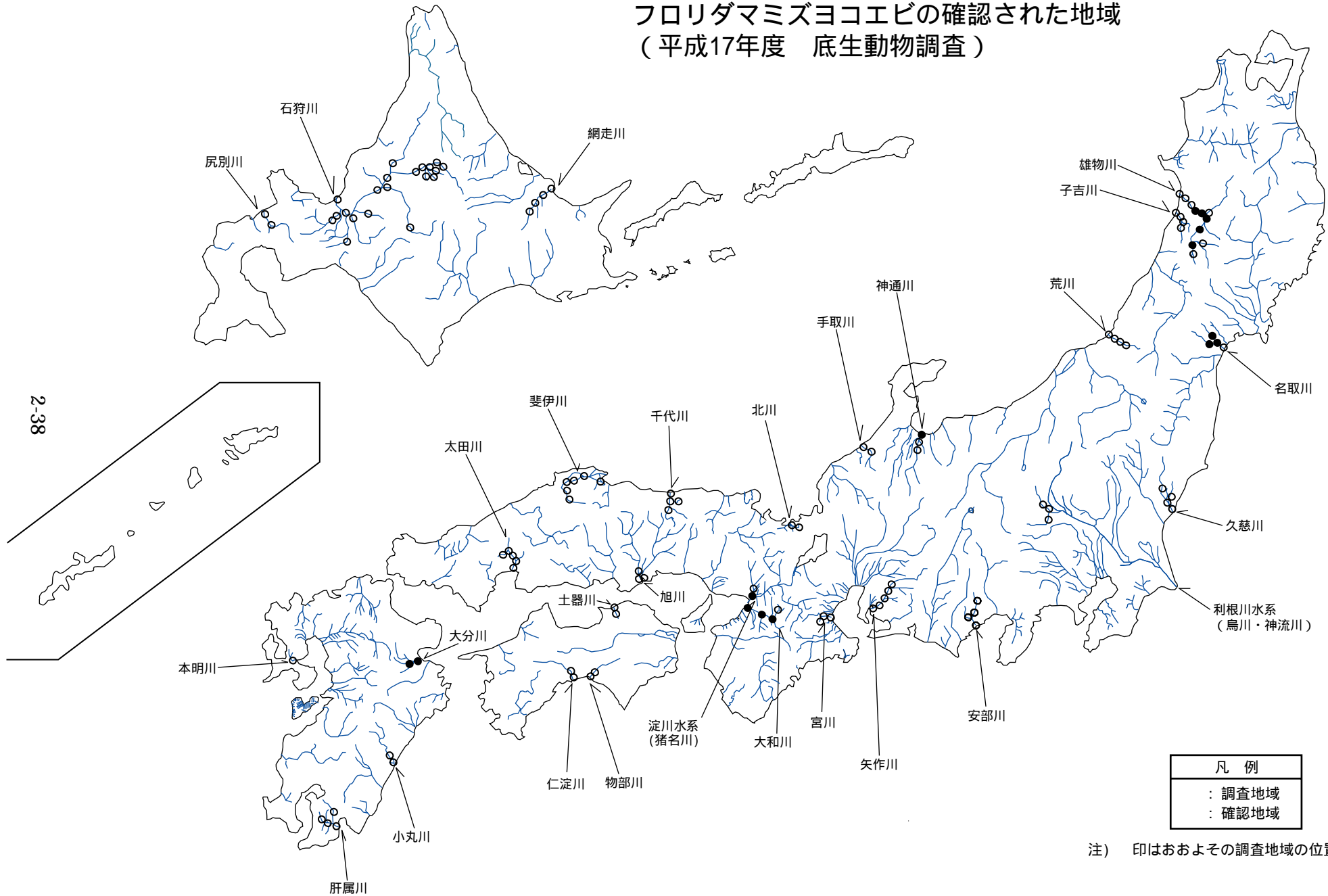
確認河川数の比較 (対象河川: 28 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
フロリダマミズヨコエビ	0 河川	0 河川	6 河川

フロリダマミズヨコエビは、北米原産の体長1cmほどの小型のヨコエビです。日本では1989年に利根川に流出する古利根川沼の水路ではじめて確認されました。外国から持ち込まれた水草に付着して侵入したのではないかと考えられています。2000年代に急速に分布を拡大し、近年では、東北地方から九州地方に至るまで広い範囲で確認されるようになりました。フロリダマミズヨコエビは、1年を通して産卵可能で、また、汚れた水や夏季の高水温にも耐性が高いといわれており、同じような生態を持つ在来種との競合が懸念されています。

河川水辺の国勢調査では、平成16年度の調査ではじめて確認されました。今回とりまとめを行った28河川では、東北地方の名取川、雄物川、北陸地方の神通川、近畿地方の猪名川、大和川、九州地方の大分川の6河川で確認されました。

フロリダマミズヨコエビの確認された地域 (平成17年度 底生動物調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) 印はおおよその調査地域の位置を示す。

・アメリカザリガニを本州以南の 35 河川で、ウチダザリガニを北海道の 1 河川で確認

国外産の甲殻類であるアメリカザリガニ、ウチダザリガニの確認状況を整理しました。

アメリカザリガニは、アメリカ合衆国南東部の原産で、食用として養殖するために持ちこまれたウシガエルの餌として国内に持ちこまれました。ウチダザリガニは、北アメリカ原産で、1920 年代に食用として日本各地に導入されました。現在は、北海道の各地や福島県などに生息します。

今回とりまとめを行った 55 河川では、アメリカザリガニは本州以南の 35 河川で確認されました。ウチダザリガニは、北海道の二級河川の斜里川で確認されました。前々回、前回は調査を行っている 49 河川での確認状況を比較すると、アメリカザリガニは前回と今回はほぼ同様でした。ウチダザリガニは、斜里川では今回始めて確認されました。

(資料掲載: 2-40 ~ 41、2-44 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 49 河川)

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
アメリカザリガニ	31 河川	33 河川	35 河川
ウチダザリガニ	0 河川	0 河川	1 河川

アメリカザリガニは、アメリカ合衆国南東部の原産で、食用として養殖するために持ちこまれたウシガエルの餌として国内に持ちこまれました。ウチダザリガニは、北アメリカ原産で 1920 年代に食用として日本各地に導入されました。生態系や在来種に大きな影響があるとして、外来種ハンドブック (日本生態学会編, 2002) で侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。また、アメリカザリガニは、環境省の外来生物法の要注意外来生物、ウチダザリガニは特定外来生物となっています。

今回とりまとめを行った 55 河川では、アメリカザリガニは本州以南の 35 河川で確認されました。ウチダザリガニは、北海道の二級河川の斜里川で確認されました。前々回、前回は調査を行っている 49 河川での確認状況を比較すると、アメリカザリガニは前回と今回はほぼ同様でした。ウチダザリガニは、斜里川では今回始めて確認されました。

